

## 郭 舸 韜 氏 博士論文審査要旨

### 1. 論文の主題と構成

郭舸韜氏が提出した博士学位請求論文「人民元為替レートの変動が中国の輸出入に与える影響について」は、人民元為替レートの貿易収支調整機能に関し、実証的に検証を行った研究である。

本論文の特徴は、以下の2点にある。第一の特徴は、為替レートの貿易収支調整機能に関する二つのアプローチ、マーシャル・ラーナー条件に関する研究、および為替レートパススルーに関する研究を踏まえ、人民元為替レート変動の中国貿易収支への効果を複眼的に検証していることがあげられる。第二の特徴は、それに際して、貿易される各財分類の国際市場・中国国内市場競争条件、さらには産業構造による調整機能への影響をより厳密に考慮するために、類(部門)別の実効為替レートを独自に導出し、それを用いた分析を行っていることである。

本論文は、以下のように構成される。

- 1 研究背景と問題意識
- 2 先行研究
- 3 中国の対外貿易と人民元為替レート
- 4 人民元為替レートと貿易額の関係
- 5 人民元為替レート変動の輸出財価格への影響
- 6 人民元為替レート変動の輸入財価格への影響
- 7 貿易収支を調整しうる他の要因
- 8 結論/インプリケーション

### 2. 論文各章の概要

本論文の概要は以下の通りである。

「1 研究背景と問題意識」では、為替レート変動の貿易収支調整機能に関し、1980年以降の日本、アメリカ、そして中国の動向を概観し、理論的に想定されるようには機能してない可能性を指摘し、その検証を課題として提起している。為替レートの貿易収支調整機能は、今日の中国の為替レート政策に対する圧力の理論的根拠となっており、その検証を通じて、貿易収支調整にアプローチする政策としての為替レート誘導政策の有効性を検証することを課題として設定している。

その際に、本論文の独自の工夫として、類別実効為替レートによる検証の必要性を提起している。マクロのデータの動向を踏まえれば、調整機能が必ずしも働いていない可能性が予想されるのであるが、先行研究では、その要因探求の方向性の一つとして、部門別の市場競争条件の影響による企業の価格設定行動の影響の研究が行われている。このような動向を

踏まえて、為替レートの貿易収支調整機能に関する実証研究に関しても、部門別の競争条件を反映した部門別貿易収支を対象とした研究が進められてきている。本論文ではその有効性を評価しつつも、その際に用いられる為替レートが貿易総額ベースの実効為替レートであることが、集計バイアスを引き起こしている可能性に着目し、それを回避しうる類(部門)別の実効為替レートによる分析の必要性を主張している。

「2 先行研究」では、この分野にかかる先行研究が紹介されている。為替レート変動の貿易収支調整機能に関する古典的ともいえる条件、マーシャル・ラーナー条件に関する先行研究の検討からは、その初期条件としての貿易収支均衡条件を緩和した条件、一般マーシャル・ラーナー条件に関する研究を紹介し、それによった検証の必要性を確認している。また、パススルー(為替レート変動の輸出入価格への転嫁率)に関する研究に関しては、全般的なパススルー率の低下傾向が指摘されていること、部門別貿易収支に関する研究も進められてきていることが紹介される。さらに、それらを踏まえて類別の実効為替レートをを用いた研究の必要性を指摘し、その導出方法に関する先行研究をフォローしている。

「3 中国の対外貿易と人民元為替レート」では、中国の貿易収支の推移及び為替レート政策の動向を整理したのち、本論文の分析にとって重要な要素となる類別(名目)実効為替レートの導出を試みている。指標の選択及び方法について丁寧な検討したうえで、日本についての先行研究である塩路・内野(2010)の方法を参照し、その導出を行っている。

「4 人民元為替レートと貿易額の関係」では、現状の中国に関して、一般マーシャル・ラーナー条件の成立如何を論じている。これは岡部(2010)により一般化された形で定式化されたもので、初期状態における貿易収支不均衡のケースを内包できる条件として提起されている。これについて本論文では、3で導出した類別実効為替レートをを用いて、統計的検定手続きを経たうえで、部門別のマーシャル・ラーナー条件の成立状況を検証している。その結果、全体としては不完全ながら為替レート変動が貿易収支を変動させうることを示された。しかし、部門ごとには、その競争条件、需要の価格弾力性の性質などにより為替レートの影響が限定されるケースがあり、特に中国の主要輸出品である繊維、電気・電子部品、機械においては、一般マーシャル・ラーナー条件は成立しないことが示された。

「5 人民元為替レート変動の輸出財価格への影響」「6 人民元為替レート変動の輸入財価格への影響」では、対称的な方法により、人民元為替レート変動の輸出入価格へのパススルー率が検証されている。データと分析方法の整合性に関する統計的検定を経て、それぞれ、為替レート増価と減価時のケース、そして2008年1月から2018年6月までの期間を2015年8月前後の期間毎に、パススルー率が検証されている。このような設定は、一般に為替レートの増価と減価の影響には非対称性が観察されることがあること、そして2015年8月の人民元為替レート制度改革前後で人民元レートの動向が転換したことを反映する分析とするために採用されている。さらにここでも集計データと部門別データに関して検証が行われている。

輸出については、繊維、電気・電子製品という中国の主要輸出部門において、分析対象期

間前半よりも後半においてパススルー率が低下していることが見出されている。これらは中国企業の国際生産の展開を含む、国際的な生産ネットワーク中での貿易の比率の高まりの影響という可能性が指摘されている。

輸入については、輸出におけるよりも高いパススルー率が示される部門が観察される。2期間の比較では、繊維を除きパススルー率は低下傾向を示すことが確認された。この点は、産業の国際競争力の相対的変動や国際生産の影響により説明が試みられている。中国の競争力が相対的に低下しつつあるとみられる繊維産業では、パススルー率が上昇する一方、中国の産業力が高まりつつあるとみられる電気・電子産業では、外国輸出企業による為替レート変動の価格への転嫁が難しくなっている傾向があるのではないかと、ということである。

以上の分析結果から、人民元為替レート変動の貿易収支調整機能には限界があると、結論付けられる。その点を踏まえ、「7 貿易収支を調整する他の要因」では、他の調整要因について概論的に検討している。この部分は、詳細な先行研究のサーベイや精緻な分析が行われているわけではなく、今後、氏がこの問題分野において研究を進めるうえで可能性のある方向について準備的な考察を行った部分とみることができる。

「8 結論/インプリケーション」では、人民元為替レートの貿易収支調整機能について、5,6で分析したような部門別の市場状況を反映した分析で得られた結論、つまり、その機能の前提となるパススルー率が低下しているという実証結果を踏まえれば、限界があるといわざるを得ないと結論付けている。それと同時に、3の分析結果から示されるように、まったく機能しないものではないこと、また初期条件における貿易収支不均衡が小さければ小さいほどマーシャル・ラーナー条件のハードルが低くなることを踏まえて、7で検討したような他のアプローチとの組み合わせによる政策の方向性が示唆されている。

塩路悦郎・内野泰助(2010)「類別名目実効為替レート指標の構築とパススルーの再検証」『経済研究』第61巻第1号、1月、47-67ページ。

岡部光明(2010)「為替相場の変動と貿易収支：マーシャル＝ラーナー条件の一般化とJカーブ効果の統合」『国際学研究』第39号、19-23ページ

### 3. 本論文の評価

本論文では、人民元為替レート変動の中国貿易収支調整機能について、類別実効為替レートを用いて、部門別の傾向にまで踏み込んで検証を試みたものである。本論文における分析を特徴づける類別実効為替レートの導出や、パススルー分析、また一般マーシャル・ラーナー条件という考え方は、オリジナルのものではない。しかしながら、それらを着実に吸収し、組み合わせ、統計的な検定プロセスを踏みながら分析を進めていることは、氏の研究能力を示すものとして評価することができる。特に、統計資料の入手に制約のある中国を対象として、これまで先行研究では行われていない中国について類別実効為替レートの導出を行っ

ていることは、特に評価できる。さらに、それに基づき、中国に関し、パススルー分析やマーシャル・ラーナー条件に関する精緻な実証研究を行ったことは、各部門の国際競争条件や国際生産ネットワークの在り方、またそれを基礎とした企業の行動選択をも視野に入れた方向へと、同分野における研究を、さらに深化させる糸口を開いているかもしれない。同分野におけるこれまでの研究蓄積の豊富化に貢献しうるものであると評価する。

今後、審査過程で指摘されたように、各分析を単独のものとしてではなく、相互の連関を意識した考察をより充実させることができるならば、より質の高い研究として発展させることが可能であろう。

#### 4. 結論

博士論文として合格と評価する。